



加藤景範『関東紀行』翻刻・注

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-02-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 湯城, 吉信 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00007542

加藤景範『関東紀行』翻刻・注

湯城吉信*

An Annotated Reprint of Kato Kagenori "Kantokiko"

Yoshinobu YUKI*

要旨

江戸時代、懐徳堂学派の学者は盛んに各地を訪れた。特に、加藤景範（竹里）（1720–1796）はしきりに各地を訪れ、多くの紀行文を残している。本稿では、その中、延享二年（1745）の江戸行を記録した『関東紀行』を翻刻、紹介する。この年は、九代将軍・徳川家重の即位（国譲り）の年であり、景範はちょうど宣下の儀の頃、江戸を訪れた。注目すべきは、景範が江戸城内を見物していることである。

キーワード: 加藤景範, 関東紀行, 紀行, 江戸城, 国譲り, 徳川家重, 懐徳堂

1. はじめに

本稿は、懐徳堂で学んだ歌人加藤景範（号竹里）（1720–1796）著『関東紀行』の翻刻である。この紀行には、延享2年（1745）秋の江戸行の様子が記されている。同書は東洋文庫に所蔵されているが、大阪府立中之島図書館にも複写がある（請求記号 223.6/130、昭和48年複製、22枚）。

本書は巻物で、和文で書かれた文章以外に彩色画が5幅ある。景範は画を牲川充真および吉村周山（1700–1773）に学んだ^[1]。多治比郁夫氏はこの紀行の画は景範の自筆であろうと推測する（「加藤景範年譜」p.25）。

江戸行当時、景範は二十代半ばの若さで健脚を誇ったようだ。往路の中山道は標高差もあったが、付き人とともに苦しみながらも徒歩で越えていった様子が記されている。

この旅行の大きな目的は富士山を見ることであった。往路、山道に苦しんだ末、塩尻から初めて見た富士山は格別であったようだ（十月二十日の記述）。また、十一月十一日の見附での総括を見れば、道中ずっと天気恵まれ富士を存分に堪能できた様子がわかる。

行きは中山道を取り、延享二年（1745）十月十一日に出発し二十六日に到着している。江戸では一週間ほど滞在し、帰りは東海道を取り、十一月五日に出発し十九日に到着している^[2]。付き人は一人であった。

折しも、江戸では九代将軍・徳川家重の即位（国譲り）

の儀式（図1参照）が行われていた。注目すべきは、景範が宿の主人を頼って、江戸城に入り込んでいることである（十一月二日の記述）。江戸時代、警備が厳しいはずの江戸城を庶民が見物することは基本的にあり得ないはずだが、実際は存在したことが記録に残っている^[3]。景範のケースもそのような例外の記録として貴重である。

〔注1〕『加藤氏家譜』、「加藤景範年譜」p.35。『東区史』人物篇に景範の画幅を載せる。牲川充真については、木村重圭「大坂画壇の展開と狩野派—森狙仙筆 墨馬図をめぐって」に言及がある。牲川充信（にえかわみつゆ）の子か。

〔注2〕江戸時代、大津宿から江戸までは大名行列で11日から12日、個人の旅行者は14日から15日を要したという（『江戸生活事典』p.44）。それからすると、景範のペースもまずまずだったと言える。なお、行きに中山道を通ったのは東海道で問題が発生したからであるという（十月十三日の記述参照）。

〔注3〕鈴木由紀子『大奥の奥』序章「大奥をのぞき見た人びと」を参照。



図1 宣下の儀の様子（『徳川吉宗と江戸城』34頁）

2015年8月17日 受理

* 総合工学システム学科 一般科目

(Dept. of Technological Systems : Liberal Arts)

本書には、歌は6首見える。画と歌はそれぞれ以下のようである。景範の感動を催した地点を確認することができよう。

【画】5幅

- 1, 木曾の山 (斧滝、駒ヶ岳) : 十月十九日
- 2, 富士を望む (塩尻、諏訪、高島城) : 十月二十日
- 3, 浅間 (碓井、軽井沢、妙義山、追分) : 十月二十二日
- 4, 江ノ島 (遠くに富士) (箱根、江ノ島) : 十一月六日
- 5, 富士 (富士川) : 十一月九日

【歌】6首：富士山を詠ったものと紅葉を詠ったものが半々。

- 1, 露しぐれいたくもるてふ山の名もまだき紅葉の色にこそみれ (十月十三日、守山) …紅葉 (まだ)
- 2, 家づとに故郷ちかき旅ならば折ましものを木曾のもみぢ葉 (十月十八日、須原手前) …紅葉
- 3, ふじのねはみねもふもとも色わかで雪と雲とのひとつ白たへ (十月二十三日、群馬県坂本を過ぎてから) …富士山
- 4, うら遠み江の嶋かけてながむればそなたにはるる雪のふじのね (十一月六日、由比ヶ浜) …富士山
- 5, 江の嶋に詔たれ初しこのかみの心もしるくむかふふじのね (十一月六日、江ノ島) …富士山
- 6, 木々の色も大和にはあらぬ紅の錦をりなす唐土 (もろこし) が原 (十一月七日、高麗山 (こまやま、平塚付近)) …紅葉

【凡例】

- ・解説に自信のない箇所には「？」を付けた (虫食いで欠けている箇所もある)。
- ・句読点、濁点を適宜補い、台詞には「」を施した。
- ・「也」と踊り字 (「、」「く」) はかなに直した。
- ・ふりがなや漢字を補った方がわかりやすいと判断した箇所には (＊) として記している (湯城による挿入)。
- ・漢字は通用字体に改めた。
- ・注は、基本的に (特に長い十月二十日など以外) その日の記述の後に挿入した (注の箇所は＊で明示)。
- ・参考になると思われる画像を挿入した (『木曾路名所図会』(ほぼ同時代) など、今の様子の写真)。

2. 翻刻

【題名】

題箋「竹里君関東紀行 絵入」 1/2-E/3

【本文】

こと国の人さへ使に物してはかならず目おどろかすといふなる富士をひとつ国にありて見ざらんは口惜きわざなり。いかで思ひ立なんと思へど、草枕一夜二夜のほどに

もあらねばさてすぐしぬ。ことし延享乙丑神無月中の比、関の東に御国譲の御詔使下りたまふに、「事のついでに、めでたき御よそひをもおがみ奉りてよ」と父のしみてすすめ給ふになん、やうやうおもひたちぬ。下部一人にかたばこ*持せて、十一日の夕べ大江の岸より舟にのる。

〔注〕○かたばこ 肩箱。肩に担ぐ荷物入れ。

十二日、明方伏見につく。道よりいささか雨ふる。京にいたる。

十三日、曙すぐる程、逢坂山をこえて湖のほとりまの*の入江などいふあたり過る程より、けしきばかり打時雨たり。東海道はさはる事ありて、にはかに草津より木曾路*におもむきぬ。守山のほとり紅葉やや色づきたり。

露しぐれ いたくもるてふ 山の名も

まだき紅葉の 色にこそみれ …歌1

暮かかるほど、鏡山のふもとなるかがみの里*につく。月くまなくさしていであり。

〔注〕○まの 真野。○木曾路 中山道の別称。中山道は、東海道よりも十里 (約40km) 程長く、しかも山がちで、往来には困難が伴った。しかし、東海道のような大きな河川が少なく、大水の川留によって何日も逗留することなく、ほぼ予定通りの旅ができたため利用する人も多かった。○鏡山のふもとなるかがみの里 秋里籬島『木曾路名所図会』巻1に画がある (図2参照)。



図2 鏡山 (『木曾路名所図会』巻1)

十四日、老曾のもり、越知川など過て磨針の峰*にのぼる。かたかけたる家にやすらひてふと見かへりたるに、湖はただ目のしたにて、竹生嶋、たけ嶋などいとちいさやかにみゆ。下り行さきに、伊吹山のふもとをめぐりて柏原*にやどる。

〔注〕○磨針の峰 『木曾路名所図会』巻1に画がある (図3参照)。○柏原 かしわばら。現滋賀県山東町。伊吹山南麓に位置する。



図3 磨針嶺（『木曾路名所図会』巻1）

十五日、夜ふかくいづ。長久寺*といふ里の中に、近江とみのの堺木あり。国を隔ててとなりどち物いひかはすとて、ここを寝物語*となんいふなるべし。不破の関屋は跡もなく霧のみふかく立へだてたり。此ほとりを関が原といふ。かの戦の陣とりのやうなど里のおのこよくしりて語る。首塚といふものここかしこにあり。さるべき人のしるしにこそあるらめ。わろ者のおこのわざにより多くの人そこなはれたるよと思へばそぞろさむく念もよほさる。さはさち成かたもはた有けんかし。此日加納*にとまる。

〔注〕○長久寺 現滋賀県米原市長久寺。○寝物語 近江と美濃の国境を挟んで両国の番所や旅籠があり、壁越しに「寝ながら他国の人と話合えた」ので、寝物語の名が生まれたと言われる『木曾路名所図会』巻2に画がある（図4参照）。○加納 現岐阜市。中山道六十七宿、美濃十六宿の一つ。



図4 寝物語の里（『木曾路名所図会』巻2）

十六日、はるばると長き松原を過て山こえつつゆくに、屏風を立たるやうの高き岩の上に出たり。下はみなざる水、藍をときたらんやうなり。柴取童子にとへば、「是なん木曾川の末なり」といふ。太田*の里にて是を渡りみ

たけ*にこよひのかり枕す。山の上に蔵王堂*の有を吉野になずらへたる名なめり。

〔注〕○太田 現岐阜県美濃加茂市。中山道六十七宿の一つ。太田の渡し場跡付近の河川敷は化石林公園として整備されている。○みたけ 御嶽。現可児郡御嵩町。○蔵王堂 御嵩の集落の南東の可児川を渡った地に、集落の人々が吉野の蔵王権現を勧請して社を建てた。そして吉野山を尊称した「御嶽」がその集落の地名となったという。木曾御岳とは関係がなかった。蔵王権現は明治になって、廃仏毀釈の嵐の中、金峰（かねみね）神社と改名されている。

十七日、細久手*といふ所にて酒のみみたるに、年の比四十斗の法師のおかしげなるが、馬にのりて出きたり。「高野より江戸におもむくなり」ときこゆ。ともに物などくひて行つれぬ。琵琶坂*をこゆる程、こしの白根*、木曾のみたけなど見ゆ。今日の道みな山なり。中津川*にやどる。

〔注〕○細久手 現岐阜県瑞浪市。○琵琶坂 中山道の難所の一つに数えられていた峠。眺望が有名で『壬戌紀行』にも「ここよりは伊勢尾張の海もみゆと云」と言う。『木曾路名所図会』巻2に画がある（図5参照）。○こしの白根 白山のこと。『古今和歌集』980に紀貫之の「思ひやる こしのしら山 しらねども ひとよも夢に こえぬよぞなき」という歌がある。○中津川 現岐阜県中津川市。中山道六十七宿の一つ。



図5 琵琶嶺（『木曾路名所図会』巻2）

*琵琶峠は標高558m、全長約1km、高低差は西側83m・東側53mで、中山道の難所の一つに数えられていた。それだけに峠からの眺望は良く、多くの文献に書かれている。ここには日本一長い石畳（全長約730m）が敷かれていた。開発から取り残されたため、石畳、一里塚などが残っていた。平成9年から12年にかけて当時の様子に復元された。

十八日、信濃のさかひにかかり、落合*より木曾の山にいる。一つづきの道なれど、山水のおもむきことに物すごく、家などみな板屋にてかべしろ(*壁代?)に板をはる。物いひなどいとむくつけけれど、大方の心ざまめまめしくなれ、ひがめる事なし。絶てなきものはあざらけた?

魚、海のも河のもただ雞の子をのみ

よきものとす。畑?には麦苗四寸斗

も生なり。「よそにはまた種をだに

まきあへぬを、ここにのみなどかか

るぞ」と里の男にとへば、「此山の

間は雪いとはやう降そめて、大方は

る日はまれなり。ややつも行ま

まに土をも閉あぐる?なれば、根さ

しひろがらぬ苗な?どは其まま消

めり。さればぞ、いそぎて物するな

り」といふ。此日折々打しぐれたる

に雲ふかき峰をわけ、霧けむる谷の

底をめぐりながれにそひてゆく。と

ころどころの道のとだえに丸?木

してかたかけ出したるはききわた

るかけ橋なり。むかひは切たてる

やうの岩山に紅葉の紅なる黄なる

立まじり、青みたる水のなかに黒き

岩のいと大きやかなるむくつけく

指出て、波白く打かくるなど五つの色調ひたりといはん

は中々心おとりすべし。尊くほそらかに落る滝のあたり

にはひかかる蔦かづらのぬれ色わきててる物のゑやう

(*絵様)にもかかまほしげなり。

家づとに 故郷ちかき 旅ならば

折ましものを 木曾のもみぢ葉 …歌2

野尻のさきに、山あひより此川へ落る流れを蜷(*にな、伊那?)川といふ。長き橋*渡せり。橋柱はなくて岸より木をくみ出しかけたるなり。これをわたりて須原*のさとに宿る。

[注] ○落合 現岐阜県中津川市。○橋 『木曾路名所図会』巻3にある「阿満橋(あまはし)伊奈(いな)川に架(わた)す。長(ながさ)七間半。杭(ぐひ)なし。東西より芻(いはね)出し也」というものであろう(図6参照)。○須原 現長野県大桑村。須原宿は、木曾十一宿の中央に位置する所謂中三宿の一つ。

図6 溪斎英泉「木曾路野尻伊奈川橋遠景」→

(1835年?)

十九日、あやまりて子の時過る程より立ぬ。月すさまじくさえわたりて、山風もいとひややかに、笠もかた箱の上も霜白う置、衣もしめりにしめりたり。水の音も山びこのこたへさへそひて、遠近気(*け)とをく物すごき谷陰をゆくに、



【画1】斧滝、駒ヶ岳

*文字:左上「駒嶽」、中央「斧滝」。

鳥のねほのかにきこゆ。「いと喜し?とたどりいきたれば、小き家のあなる、まだよくねたるを戸たたき、驚かせて打いる。いろとかいふ物に枯枝もやしたるにぞ、すこし寒さ忘れて出ぬ。おぼつかなき明暮の空にいと白く見あげらるるは御嶽なり。谷深くみる雲のやうやう立のぼるひまよりたけ十丈斗もあらんとみえて、いはほの上よりおつる滝あり。かかるものききも及ばざりけるよと驚かる。小野の滝*となんいふめる。ねざめの床*は道よりしもにあり。まだ明やらぬ程なればあや?なかる



べしとて打すぎぬ。やうやう日出るほど、向ふの峯こしに駒がたけ*いと高く指いでて雪の色のきらきらかがやきたる、まだ見ぬふじもかばかりやはとおぼゆ。其さきなる橋を渡り、菽原*のさにて木曾の溪をはなる。鳥居山*をこえ、ならい*の里にくだる。

〔注〕○小野の滝 現長野県木曾郡上松町。広重『中山道六十三次』に描かれている上松は小野の滝の絵。木曾八景*にも数えられたが、明治42年、真上に鉄道橋が造られ、景観は損なわれた。『木曾路名所図会』巻3に画がある(図7参照)。



図7 小野滝(『木曾路名所図会』巻3)

*木曾八景は、近江八景になぞらえて尾張中納言宗勝の頃(1743年前後)、尾張藩の書物奉行をしていた松平君山が木曾路を訪れ作ったともいわれ、一説には尾張の俳諧師、横井也有ともいわれている。○ねざめの床 寝覚めの床。現上松町(あげまつちょう)にある木曾川沿いの景勝地。花崗岩の岩盤が木曾川の激流に浸蝕されて方状節理をなす。ただし、現在の寝覚めの床の姿は、水力発電のために木曾川の水位が下がったために現れたものである。地名は、浦島太郎が玉手箱を開け、夢から覚めたということにちなむ。○駒がたけ 駒ヶ岳。『木曾路名所図会』巻3に「駒嶽遠景」と題する画がある(図8参照)。○菽原 現木祖村。○鳥居山 鳥居峠。現木曾郡檜川村奈良井と同郡木祖村菽原の境にある峠。美濃国と信濃国の国境にあった。標高1197m。『木曾路名所図会』巻3に「鳥居嶺(とりみたうげ)」と題する画がある(図9参照)。○ならい 奈良井。中山道で最高所の宿。



廿日、猶谷川にそひてゆく(*奈良井川?)。洗馬*の里にて川をはなれぬ。されど此頃ゆく足のもとも、かりねの枕の下も、只波の音にのみなれぬれば、石ばしる音は猶耳の底に残りてかしがまし。桔梗が原*より西の方に飛驒の山々見ゆ。

〔注〕○洗馬 せば。奈良井川上流左岸、松本盆地の南端から木曾山脈北麓にかけて位置し、地内を古曾部川が流れる。○桔梗が原 長野県塩尻市街の北方から西方に広がる台地。西縁は奈良井川の深い侵食谷で限られるほか、東、北も浅い谷などで限られた火山灰土壌からなる。

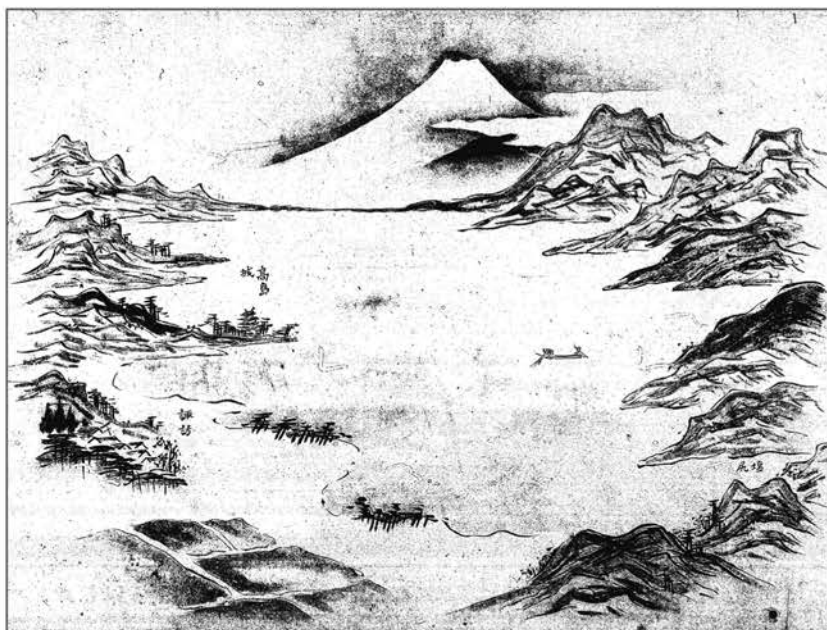
皆雪降たり。「今日なん、富士を見初る日なり」と此比人のかたりつれば、かねて心にかかりし時雨の雲の、思ひもなく晴わたりたるぞ、限りなきうれしきなめり。いざと急ぎて塩尻と思ふみねにのぼりたるに、谷ごしにあらぬ山向へり。「その峰にこそ」といととくはしりのぼる。猶山向へり。足も休めず、又のぼる。猶同じ。山立ふさがる。「こはいかにそもいくへ隔つる事ぞ」とはらだたく、かくとしらせざりつる人もにくしや。さはれ、やすらはん心地もせず、「猶いくへもあらばあれ」と下部もつぶやきてのぼる。峰に打あがりたれば先へだつる山はなし。きとみやりたれば、諏訪の湖ぞ、けちかくみゆる。其さま、草の子?に出たる唐画のここ地す。高き山遙かにめぐれるが辰巳の方にあきて、山の尾崎糸を引たるように長くつづきたるあはひに、薄墨もてくまどりあらはせるやうにいと白きが、すそは消て空に浮びたる。はるかなるあはひなれば、さばかり大きにはあらねど、まがふべしやは。見るにかよふべくもあらねど。



図9 鳥居峠
(『木曾路名所図会』巻3)

*御嶽を眺める旅人の様子が生き生きと描かれている。

←図8 駒ヶ岳遠景(『木曾路名所図会』巻3)



みるみる山を下りて下の諏訪にいたる。ここには湖のものなるはへなどやうの物あり。宿求め置て明神の御社に詣て其前にあるいでゆ*にいる。四五人斗あひたるが中に都へ帰る人聞出て古郷への文あつらへやる。

〔注〕○ゆ 『木曾路名所図会』巻4に「諏訪温泉」の画がある(図12参照)。

廿一日、和田嶺*にかか。やうやうしらみ行ほどあべ?の方にみたけ、駒がたけ、乗鞍などをおさにして、甲斐、飛騨、信濃の山々いや重なり、雲か霧かいと白うふもとをたちきりたり。すべて見くだ

【画2】諏訪湖(高島城、諏訪、塩尻、遠くに富士)
*『木曾路名所図会』巻4の画が似ている(図10参照)。また、同書巻3の塩尻の画はそこに至るまでの道のりを髣髴とさせる(図11参照)。諏訪湖から富士山へは約91km。



図10 諏訪湖(『木曾路名所図会』巻4)



図12 諏訪温泉(『木曾路名所図会』巻4)

す目の内、山ならぬところなし。此あたりことに地高く嵐もはげしきには、山のこの葉皆ちりはて、草の緑、露(*つゆ)ものこらず、霜柱は土をうがちてつぎをうへたらんやうなり。ふむに脂?落ぬべし。石原坂の上よりはるかに見とがめらるる烟は浅間のたけなりけり。東の方とのみ駒の名に聞し望月*のさとに鞍をおろす。

〔注〕○和田嶺 和田峠、現下諏訪村和田村。小県(ちいさがた)郡和田村と諏訪郡下諏訪村の境にある峠。現和田峠は標高1531mだが、中山道の和田峠は、現在の峠の西約1kmにあり、標高は1650mあった。中山道の中で標高が最も高く、下諏訪~和田の宿間が五里十八町(約21km)あるため、道中最大の難所であった。付近は、一部、古道が整備、復元されている。○望月 現佐久市望月。中山道の宿場。



図11 塩尻(『木曾路名所図会』巻3)
*真中上に「塩尻峠より富士峯遙かに見ゆる」とある。

廿二日、夜のほどより雨そぼふる。此比後れてありし法師又出来たる。浅間*の麓行程より雨やみぬ。みねの雪の中より烟のくゆりのぼるいとあやし。まれに大やけとい

ふ事あり。天青き炎すさまじくもえあがり、石をとばせ砂をふらすといふ。追分*、沓掛*など、三里がほどの原に黒き焼石のいと大きなが数もなくあり。かる井沢より山かごにのりて碓井の峰*にかかる。「はね石*のあたりにて暮ればいとから（*辛）かりなん」とて、岨？とも谷ともいはず、此かごただとひにとふ。はね石にかかる程、はやくれに暮？たり。松の光を頼みて、からうじて坂本*につきぬ。此夜は法師と相やどります。



図13 浅間嶽（『木曾路名所図会』巻4）

〔注〕○浅間 後の天明三年（1783）の大噴火について景範は文章を書いている（『加藤竹里文集』下巻所収「浅間嶽炎上記」）。『木曾路名所図会』巻4にも煙を上げる浅間山の様子が描かれている（図13参照）。○追分 現軽井沢町。浅間山南麓の標高1000mに位置する。地名は中山道と北国街道の分岐点であったことに由来する。追分宿郷土館がある。○沓掛 現青木村。○碓井の峰 碓氷峠（うすいとうげ）。現軽井沢町。古峠は現在の峠の北方にあり、標高1180m。峠の坂本側は尾根伝いに険しい急坂を上下するため、和田峠などとともに中山道の難所であった。○はね石 芻石茶屋は坂本宿から碓氷峠までの山中にある茶屋で、中山茶屋の次に大きな施設であった。芻石という名前は、般若からきていたとも言われる。般若峰、はんね石、般石（ばんじゃく）坂などの名前が江戸時代の文献に見られる。○坂本 現群馬県安中市松井田町坂本。地名は碓氷峠の坂の下にあることに由来する。上野七宿の一つ。

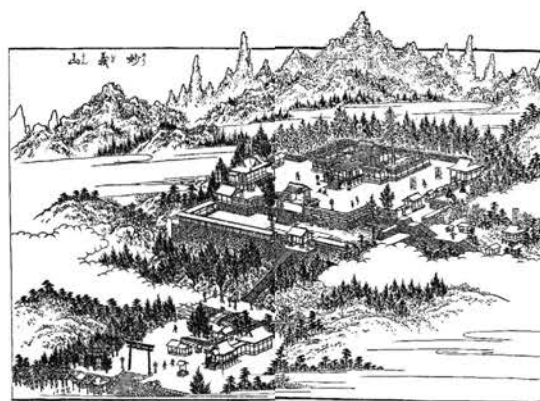


図14 妙義山（『木曾路名所図会』巻4）

*山頂が杵を飛び出して描かれている。



【画3】浅間（追分、軽井沢、碓井、妙義山）

*妙義山は『木曾路名所図会』巻4に画がある（図14参照）。文字：上「浅間」、左「追分」、中央右「軽井沢」、右「碓井」、下「妙喜山」、下右「ハ子石」。

廿三日、これよりはこゆる山もなし。富士はやや近く山ごしにみゆ。

ふじのねは みねもふもとも 色わかで 雪と雲との ひとつ白たへ …歌3

行々て、廿六日といふに、戸田の渡り*にいたりぬれば、此日將軍家近きあたりに、御狩ありとてわたりとまりぬ。ここにて、かの法師にわかる。かくて、里の男にあなひさせてあぜの細道を河つたひにゆく。此辺、公達の御狩庭*なりとて殺生をいましむ。鶴、白鳥などむれみ

てあさる。近よりてもおそるるけなし。せんじゅ*の橋より江戸にいりぬ。国にてしれる人の年々下れるに、宿の事などかねてよこし置たれば、よき所求め置たり。

〔注〕○戸田の渡り 荒川にあり、現板橋区舟渡（ふなど）と対

岸の現埼玉県戸田市を結んでいた渡し。○御狩庭 狩り場。江戸廻りに位置する足立区域は、徳川將軍の狩場となっており、鷹狩や舟遊びなどで將軍が来訪した。○せんじゅ 千住。『木曾路名所図会』巻6に画がある(図15参照)。



図15 千住大橋(『木曾路名所図会』巻6)

十一月朔日まで四日の程は、神田聖堂*をはじめ名高き宮寺かつしれる方々とひありきたり。それが中に麻布のほとりなる亭翁*の坊をとぶらひしぞ、ことになつかしげなりし。ふりたる堂のかたはらにかごやかに住?なしたり。い?ひ入たれば、やをら堂の方よりいできて、一間にいざなひいる。年の程は七十斗にやあらん、打見るより唯人とみえず。清げにゆへつきたり。何くれの事かたりて「帰なん」といふに、「又下りなんこともおぼつかなかるべし。わが影(歌?)もかくかたぶきにたれば、今日のたいめ(*対面)が始めのおはりにぞ侍るべきを」とて、しみてとどめられ、日たけて帰りぬ。おこの歌ぎきにぞ有ける。

〔注〕○神田聖堂 孔子を祭る湯島聖堂であろう。○亭翁 未詳。頼春水の父で頼亭翁という歌人がいるが、年が合わない(1707-1783)。

二日は、將軍家宣下*ある日なり。その御よそひおがまんとして夜の程より人々さはぎののしる。宿のあるじも「故有て御城へ行」といふに、おのれもつれていきぬ。公卿を初め奉り、国々の君の布衣隨身よりしも従者数しらずぐして引つづけ渡し給ふ。こしのよそひ、馬くらのかざり、きららかにいとみ調へたる、いみじき見ものなり。目もかくまじき馬の口とり、こし(*輿)かく男まで、今日のやく(*役)に出たるをおもておこす心地してねり行もおかし。人々も大下馬*のわたりひまなきやり長刀のひま求めてゑみさかへたり。水戸侯*の入給て後「いざこ」といて行。くろがねの門十斗こえて御玄関の御前?より御くりや*のほとりまでいたる。

〔注〕○宣下 徳川宗家の当主が征夷大將軍に任命される儀式。徳川氏の礼典の中で最も重視された(『江戸幕府大事典』)。三代將軍までは上洛して、四代將軍からは勅使を迎えて江戸城で行われた。ここでの宣下は、延享二年九月一日、將軍吉宗は政務を家重に譲り、続いて同二十五日に家重は本丸に移徙、吉宗は西丸に遜退し、十一月二日に家重への將軍宣下之儀が行われたことを言う。宣下については、『徳川盛世録』に画および説明が見える。○大下馬 本丸への登城口である大手前を大下馬と言った。江戸城には他に西の丸への登城口である西丸大手門前に下馬所があった。○水戸侯 讃岐国高松藩松平(水戸)家か?(五代頼恭(よりたか)1720-、元文四年(1739)家督を継ぐ)。あるいは、常陸国松川藩松平(水戸)家か?(三代頼寛1703-1763、享保三年(1718)家督を継ぐ)。その他、常陸国石岡藩、常陸国宍戸藩が松平(水戸)家も可能性があるか。(『江戸時代全大名家事典』)○くりや 台所。附図2「御本丸表中央図」の、本丸南東角の玄関からほぼ中央部やや東の台所まで行ったのであろう(「弘化度本丸御殿」図(小松和博『江戸城—その歴史と構造』)も同様の図。台所附近は「江戸城御本丸(中略)総絵図」(『東京市史稿(皇城篇)』附図1)(深井雅海『図解江戸城をよむ』128~129頁:拡大図)を参照)。

四日にも宿のあるじが「西のまる*の殿?の内を見すべし」とていざなひ行。桜田といふより、いかめしき門いくへ(*幾重)もこえ*、丸の内より二重橋*とか?いふをわたりて西の丸へ入ぬ。されど公事をはらぬ程は殿の内へは得いらす。未の時下る程、皆まかて給ひて入ぬ。局(局?)めく所よりこくらき一間を過たれば、ただきらきらときらめきたり。御書院*、大広間、細殿のわたり、みす(*御簾)青やかにかけわたし、御屏風、からかみなど引わたされたり。画は唐国の山水の気色をたたみなし、荒瀬?*をすさまじくすくよかに書なし、あるは花鳥のやはらびたる方をも打まぜたり。御柱、天井のかなもの(*金物)にははげしき獣の形、やさしき木草のゑり物、家々の上手の限り、かねを尽し、心に任せて万(*よろづ)いきほひことにしなしたる*を、此夏の大饗にいとどみがきましたまへる有さま、唯水府に入たらん心地して、いづれをそことふとしも思ひわかれず、まなびたてんもことのはたるまじく、めもあやにいとめでたく、うるはしきかぎりなり。かくて、「あすたちなん」といふに、其夜相しれる人、これかれ出来たり。あるじよきものども調へて、夜一夜のみくらひてあそぶ。くぐだしき事ども皆もらし、つとばかりまどろむとしもなきに、下部「やや」と驚かして、「明なば例の人々送りになどいひて物せんもらうがはしかるべし」とていそぎ出たつは、五日の暁なり。品川過る比、海的面やうやうしらみたり。泉岳寺*に立よりてかの赤城義士の塚をみる。心ちよげにて又涙催さる。神南河*までは海へにて、舟どもあまたみゆ。

此夜とつか*にとまる。

〔校勘〕○る 「り」を見せ消ちして直す。

〔注〕○西のまる 西の丸。西丸御殿は將軍の世嗣や將軍を退いた大御所の住む場所で、家重に位を譲った吉宗も住んだ。享保十六年(1731)、家重のために修復されたが、天保九年(1838)に焼失した。(『東京市史稿(皇城篇)』附図1に地図「西丸御殿向表中央総絵図」がある。)○いかめしき門いくへもこえ 芝口門、数寄屋橋門、馬場先門と越えていったか?○二重橋 西の丸大手門。橋桁が上下二段に架けられていたからこのように呼ばれた。現在、皇居前広場から見える二重アーチ構造の橋が一般に二重橋と呼ばれるが、正確にはその上にある橋が本当の二重橋である。この二つの橋があるから二重橋と呼ぶわけでも、二重アーチ構造だから二重橋と呼ぶわけでもない(図16参照)。○御書院 白書院か?○荒瀬? 以下、「はげしき獣」は虎の間など、「やさしき木草」は柳の間、梅竹の間、芙蓉の間、菊の間、山吹の間などを指すのであろう。江戸城の御殿を飾った画(天保以降)は、『將軍の御殿—江戸城障壁画の下絵』『江戸城本丸等障壁画絵様』に画像がある他、東京国立博物館のHPのデータベースで公開されている(図17参照)。○泉岳寺 東京都港区高輪二丁目に現存する。赤穂義士の墓があることで有名である(図18参照)。曹洞宗の寺院で青松寺・総泉寺とともに江戸三箇寺の一つに数えられる。○神南河 神奈川。現横浜市神奈川区。○とつか 戸塚。現神奈川県横浜市戸塚区。



図16 旧二重橋(『江戸城 その全容と歴史』197頁)



六日は鎌倉の古きあと見んとて、また道たどどしき程に市場*、五大寺など過て雪の下*にいたる。「此あたりに頼朝卿の館のあと、ここはそれ、そこはたれがあとなり」と教ふ。鶴が岡の八幡宮に詣でぬ。宮居いとうるはし。一の鳥居*は一里斗南の磯辺にたてり。其間帯を引たるやうにみえて、白き真砂に並木の松つづきたり。ここよりやや東へ入て大塔宮*をこめ奉りたる土の洞あり。二階堂の谷*なり。指出たる山のすそにわにの口のやうなるが下へ五尺斗も堀?入て横の方へおくふかうみゆ。ここには組格子など立たるよと見えてますぐに切たてたり。土にてぬりたると物にも記したれど、今は岩屋になりて、げに月日の光もうとくいとくらきおくになきたまの今もとどまりたまふらんやうに覚え、其世思ひ出られて、何となき風の音も水の響も鳥の声も草の色もいと物すごく悲しめる心地して、いとどむねつふる。初瀬の里より馬をかり山をこえて、由比の浜にいづ。波いと高く打よする磯辺を行ほど、先見やらるるは富士なり。

〔注〕○市場 現横浜市鶴見区。鶴見川の下流左岸に位置する。米饅頭が名物であった。○雪の下 鶴岡八幡宮のある地名。大臣山を中心とする谷あい地。地名は、源頼朝が盛夏でも雪を賞味するため利用した氷室があったと言われることに由来する。○一の鳥居 鶴岡八幡宮の一の鳥居は材質は花崗岩で、「明神鳥居」の典型と言われる。高さは8.5mあり、柱の太さは92cmある。浜の大鳥居とも呼ばれ、創建は源頼朝公の時代まで遡る。その後度々の造り替えがなされ、現在のものは寛文8年(1668)に建造された。それまでは木造であったが、この時に石造となった。関東大震災で倒壊したが、昭和初期一部新材を補って復旧された。東側柱の旧材部分には「寛文八年戊申八月十五日 御再興 鶴岡八幡宮石雙華表」と刻まれている(図19参照)。

図18→
泉岳寺大石内蔵助墓
(2012.9.18、筆者撮影)



←図17
西の丸御殿大
奥対面所二の
間の襖絵
(東京国立博物
館HP画像検索)

*これはこれは天保期に作られた大奥の襖絵で、景範が見た画ではないであろうが、同様にきらびやかな画をいくつも目にしたのであろう。



図19 鶴岡八幡宮一の鳥居
(2011.9.22、筆者撮影)



【画4】江ノ島の向こうに見える富士

*稲村ヶ崎からこのように見えるようだ。稲村ヶ崎は神奈川県鎌倉市南西部にある岬で、由比ヶ浜と七里ヶ浜の間にあたる。
文字：中央部「江嶋」。

行先の磯すこしはなれて江のしまみゆ。

うら遠み 江の嶋かけて ながむれば

そなたにはるる 雪のふじのね …歌4

こし方には和田*、三浦*などのうらうら指したり。海のおもては青みわたりて、空と波との堺もわかぬに、眉のやうにかすかに浮びたるは伊豆の島なり。腰越*を過て磯辺におりたち、嶋まで四丁ばかりの海の瀬をわたり辨天の社に詣でて、おくの岩屋*より見れば、まほに富士向へり。

江の*嶋に 詔?たれ初し このかみの

心もしるく むかふふじのね …歌5

ここの見るめに時うつりてわつかの道なれど藤沢にとまる。

〔校勘〕○江の 「此」を見せ消ちにして直す。

〔注〕○和田 現横浜市保土ヶ谷区。○三浦 現横須賀市。○腰越 現鎌倉市。源義経の腰越状で有名。京都から下向するも鎌倉に入ることを許されなかった義経がここで逗留し、頼朝の勘当を解くよう大江広元に依頼した書状である。地名は、北方に小山を控え、南は海に面して低く、その往来の道は山腰を越えるごとくであったことに由来するという（『新編相模』）。○岩屋 江の島岩屋は波の浸食によって出来た自然の洞窟で、古くから信仰の対象として親しまれてきた（図21 参照）。

七日、こゆるぎの磯*、大磯、小磯行程、かのはらからの住ける曾我の居もみゆ。高麗寺*といふあたりは

木々の色も 大和にはあらぬ 紅の

錦をりなす 唐土（*もろこし）が原 …歌6



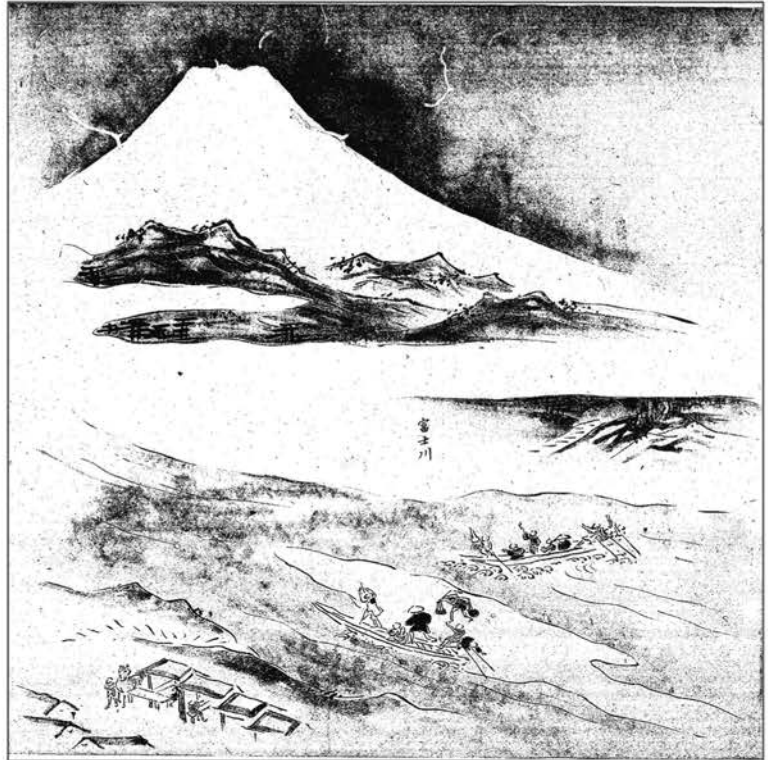
図20 二階堂ヶ谷の土牢跡 (2011.9.22、筆者撮影)



図21 江の島岩屋洞窟の入口 (2011.9.22、筆者撮影)

〔注〕○こゆるぎの磯 神奈川県大磯付近の海岸。歌枕。○高麗寺 高麗山（こまやま）は神奈川県の大磯市と大磯町に跨る大磯丘陵東端の山。高麗山とも書く。「高麗」が「こま」と呼ばれるようになったのは明治以降で、それ以前は「こうらい」と呼ばれていた。現在も地元では高麗寺山（こうらいじさん、こうらじやま）とも呼ばれる。江戸時代まで高麗寺という寺が山中にあり、現在の高来神社も高麗神社として寺内にあった。当山一帯は臨海性常緑広葉樹の自然林が保存されており、県の天然記念物に指定されている。

さかは河*を渡り、はこね山をのぼりて、湯もとの里にやどる。あるじのあないにて早雲寺*に行。北条五代の塚あり。かたはらに宗祇翁の塚有。「しらぬ翁の哥をみづから出るも有」とかたる。それより谷に下り、早河*といふわたり出湯にゆあびす。かかる谷の底にも長局*めく物しわたし病者数多つどへり。



【画5】富士川と富士

*渡しの様子が描かれる。文字：中央部「富士川」。

〔注〕○さかは河 酒匂川。○早雲寺 現神奈川県足柄下郡箱根町湯本にある臨済宗大徳寺派の寺院。山号は金湯山。本尊は釈迦如来。寺内には後北条五代の墓、連歌師・宗祇の碑がある。○早河 早川。湯浴みした温泉は湯本温泉であろう。

八日、権現堂*に参り、曾我のはらからが太刀など見る。湖をめぐり、関こえて、三島に下り、明神の社に詣で沼津?にやどる。

〔注〕○権現堂 箱根権現。明治の廃仏毀釈以降、箱根神社になった。

九日はふじのすそ野行道なり。富士川をわたり、田子の浦伝ひにさた山*へかかるほど、三保の松原、浮島が原*もみえわたり、塩やく浜のふぜい（*風情）など画にも書とめがたからんぞ口惜きや。かへりみがちに由比*、興津の浦を伝ひ、清見潟*を過て江尻にいたる。

〔注〕○さた山 薩埵峠?○浮島が原 現沼津市、富士市に跨る低湿地域。○由比 現静岡市清水区由比。○清見潟 駿河湾の湾奥部、清水市東部の興津に面する海岸。風光明媚で（『角川地名辞典・静岡県』374頁に写真あり）、明治以降も海水浴場、保養地として知られた。だが、昭和になり埋立と築港がすすみ、コンテナ基地が作られ、自然海岸は消滅した。

十日、浅間の社に詣で、阿部河を朝わたりし宇都の山*をこゆ。かの細道*といひけん方はおさおさあとをだにいらす。鶯の物よりことに色染で、こなたかなたはひまつはりたる、いとなつかしげなり。大井川を夕わたりし金谷*につく。河は瀬だえしていとやすかりき。

〔注〕○宇都の山 現静岡市宇津ノ谷と藤枝市岡部町岡部とにまたがる山。○細道 宇津の谷峠（鶯の細道）。(図22参照)○金谷 現金谷町。静岡市丸子の里の西はずれの宇津の谷峠は、「宇津の山ごえ」といわれる古道で、遠く1100年前の平安時代から室町時代にいたる700年間、都と東国を往来する旅人が利用した道であった。静岡市と志太郡岡部町との境の峠道で宇津の谷トンネルの手前の左脇から入るのが「つたの細道」である。『伊勢物語』の作者、在原業平は、駿河の国に入った。名高い宇津山にさしかかて、行く手を見ると、これから分け入ろうとする山道は木々が生え繁った暗い細道で、鶯や葛が延び絡んでいる。とんでもないところへ来てしまったものだと思っていた時、修行者に出会った。その人に「どうしてこんな山道へおいでになりましたか」と声をかけられて見れば知り合いだった。そこで、これ幸いと手紙を書いて京都の知人のところへ届けて貰った。「駿河なるうつ山べのうつつにも夢にも人に逢わぬなりけり」この手紙のように当時は鶯がずらの繁った暗く細い峠道であったことがわかる。



図22 広重「岡部・宇津之山」(東海道五十三次之内)

十一日、さよの中山*をよふかくこえて日の坂*に下る程、しののめの道見え初たり。天竜川をこして浜松に宿かる。いでや富士を見初しは塩尻なり。とちめなりしは今日の道の見附*なり。其間一日の曇日もなく、見る限り尽しつ。いづくはあれど猶ことに覚えしは江の嶋の東の磯へ打出たる時なり。すは*の海ごしに遙かにのぞみたるぞ、是には次べき。山の北おもてなれば、ふもとまで只雪の色なり。田子の浦はさらなり。原、吉原より打みるはひたおもて*にて遠のながめには後れたりとやいはん。一年の内はしらず、一日の内には曙ぞことにまさるべき、されど雲の絶えかかり、村々立のぼり見るがうちに面かはりし、朝より夕は増り、昨日より今日はめづらしくぞありし。

[注] ○さよの中山 現静岡県掛川市。○日の坂 日坂(にっさか)。現静岡県掛川市。地名は、小夜の中山の「西坂」からきている。○見附 現静岡県磐田市。街道を京都より下って初めて富士山を望むことができるころから見付と呼ばれるようになった。○すは 諏訪。○ひたおもて 真正面。

十二日、暁、立出る程より風吹き出て、荒井のわたりいとあかりしかど追手なり。「かはらぬ内にとくのれ」と舟人どもいひてこぎ出しぬ。とぶがごとむかひにつきたり。関をも過て、白すか*、二川*のあたりより山にかかる程、俄に沖の方より黒雲おほひきて山風さと吹出る程こそあれ、雨は横ざまにて、衣もひたぬれにぬれとをり、笠も吹取ぬべく目鼻にふりあてて、いきすべうもあらず。又なきはげしさなり。されど足をそらにて五ゆ*までいきたり。夜も猶やまず、あま戸なりわたり、山の木ども吹折音の枕に響きたる、いとすごし。

[注] ○白すか 白須賀。現静岡県湖西市。○二川 現愛知県豊橋市。○五ゆ 御油(「五井」という表記もあった)。現豊川市。東海道から姫街道(本坂街道)が分岐する追分の宿として栄えた。赤坂までの松並木は国指定天然記念物になっている。

十三日、暁方より空晴たり。「昨日の雨に矢矯*川水まさりて舟いでず」といひければ、「さは岡崎*にとまるべき、先行てみん」とて岡崎の城を過て川近くなるほど、馬に乗たる人うちつれてきたる。「やよ、いかに」ととへば、「舟いまつきたり、とく」といひすてて馳たり。やがて其舟にてわたる。来迎寺村*の東に八橋への路あり。いかめしく石たてて道の程、寺の名などきざみたる、いとかたはらいたくていかず。二村山*をこえて、熱田につく。

[注] ○矢矯 矢矧(やはぎ)。『新編岡崎市史』3近世篇(1992年)に「矢作川の水運と川船」(719頁)、「川船の略図」(720頁)、「東海道名所図会矢作橋図」(745頁)がある。しばしば架橋され、景観が通った延享二年は第4回架橋の最中だった(三年に完成)(図23参照)。○岡崎 現岡崎市。東海道有数の宿場であった。○来迎寺村 現知立市。来迎寺に入ると、右に折れる道の角に八橋への道標がある。元禄九年(1696)に、在原業平ゆかりの八橋無量寿寺への道しるべとして建てられた。○二村山 現愛知県豊明市。



図23 広重「岡崎・矢矧之橋」(東海道五十三次之内)

十四日、御社まだ戸ざしも明やらぬ程なれば、外よりぬかづきて過ぬ。いとかうがうしきさまなり。ここより、佐屋*にめぐりて、河舟にて桑名*につく。四日市にとまる。

十五日、関*に出るより、皆目なれし道なり。

十六日、土山*をたつ。あしたより曇り、横田川*過る比より雨いささか打そそぎたり。石部*の辺より三上山*みいだしたる。かの高ねの面影うかびて更に珍らかなり。

此日、草津に草枕す。

[注] ○佐屋 現愛知県愛西市佐屋町。東海道の脇街道に佐屋街道があった。ここから桑名まで川船で三里(熱田からは七里)。○桑名 現三重県桑名市。○関 現三重県関町。地名は、古代に鈴鹿関が置かれたことに由来する。○土山 現滋賀県甲賀市土山町。古くから伊勢とを結ぶ交通の要地であった。○横田川 現湖南市。横田の渡しは、野洲川(横田川)の現横田橋から800m上流で三雲と水口町大字泉の間にあった。右岸の橋のたもとに今も常夜灯がある。東海道十三渡の一つとして重視され、軍事的な意味からも幕府の管轄下に置かれた。そのため他の渡と同じく通年の架橋は許されず、地元泉村に渡の公役を命じ、賃金を徴収してその維持に当たさせた。これによると三月から九月の間は四艘の船による船渡しとし、十月から翌二月までの間は、流路の部分に土橋を架けて通行させたようだ。○石部 現石部町。宿駅が置かれていた。○三上山 『木曾路名所図会』巻1に画がある(図24参照)。

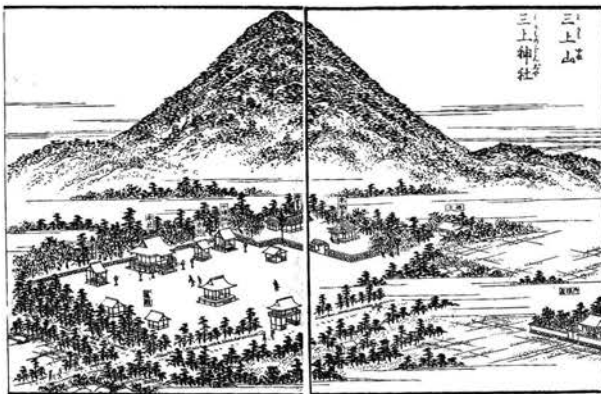


図24 三上山(『木曾路名所図会』巻1)

十七日、京へ入ぬ。此比富士に向ひし時、「ひゑの山を廿斗*といひけんはあまりなるや」と覚えしを、今日湖の辺より西の山々見めぐらすに、ひえめくものなし。「此あたりより見ゆべかめるをなどか」ととへば、「それなめり」と里の子ゆびさす。さは浅ましきまでひきく(*低く)、みしにもあらぬ心地するにぞ、かのたとへたがはずとしりぬ。

[注] ○ひゑの山を廿斗 『伊勢物語』第九段(東下りの段)に「比叡の山を二十ばかり重ねあげたらむほどして」とある。

十八日、蓮沼のがり行しに先待とはるるはふじなり。ことのはかよひがたくよく見たるかひなし。古郷の事ども、父の御文に心をちぬる物から、唯なるよりは中々ゆかしさもなつかしさもいたうすすみて、夜のあくるも待いそがれて、十九日のつとめてくだる。

此日記、みるところのさま、いひもおほせず、和歌など

も、雪のふじのねふりたる詞より纏れて今めかしきふしもなきを、人の見ん事はさらにもいはず、後のわれだにうるさかるべきかし。さは、いざ、道のほどは百ふたつ七十あまり、日は四十日斗の事、「ここにてはとあり、そこにてはかかりつ」など思ひいでんしほり(*栞)ばかりにぞ、書つけたる。

【完】

参考文献(本文で取り上げた順)

- [1] 多治比郁夫「加藤景範年譜—懐徳堂の歌人」(『大阪府立図書館紀要』8号、1972年)
- [2] 木村重圭「大坂画壇の展開と狩野派—森狙仙筆 墨馬図をめぐる」(『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』40号、2004年)
- [3] 三田村鳶魚原著・稲垣史生編『江戸生活事典』(青蛙房、1959年、2007年復刊)
- [4] 鈴木由紀子『大奥の奥』(新潮新書、2006年)
- [5] 岡崎寛徳『徳川吉宗と江戸城』(吉川弘文館、2014年)
- [6] 市川正一編『徳川盛世録』(平凡社<東洋文庫>、1989年)
- [7] 秋里籬島『木曾路名所図会』(1805年)
- [8] 児玉幸多『中山道を歩く』(中公文庫、1988年)
- [9] 『角川日本地名大辞典』(角川書店、1978~1990)
- [10] 『日本歴史地名大系』(平凡社、1979~2002年)
- [11] 『東京市史稿(皇城篇)』附図1(東京市、1925年?)
- [12] 大石学編『江戸幕府大事典』(吉川弘文館、2009年)
- [13] 工藤寛正編『江戸時代全大名家事典』(東京堂出版、2008年)
- [14] 小松和博『江戸城—その歴史と構造』(名著出版、1985年)
- [15] 深井雅海『図解 江戸城をよむ』(原書房、1997年)
- [16] 西ヶ谷恭弘『江戸城 その全容と歴史』(東京堂、2009年)
- [17] 『将軍の御殿—江戸城障壁画の下絵』(徳川美術館、1988年)
- [18] 『江戸城本丸等障壁画絵様』(東京国立博物館、1988年)
- [19] 歌川広重『東海道五十三次』(1833年)
- [20] 『新編岡崎市史』3 近世篇(新編岡崎市史編さん委員会、1992年)
- [21] 深井雅海『江戸城—本丸御殿と幕府政治』(中央公論新社<中公新書>、2008年)

難読字

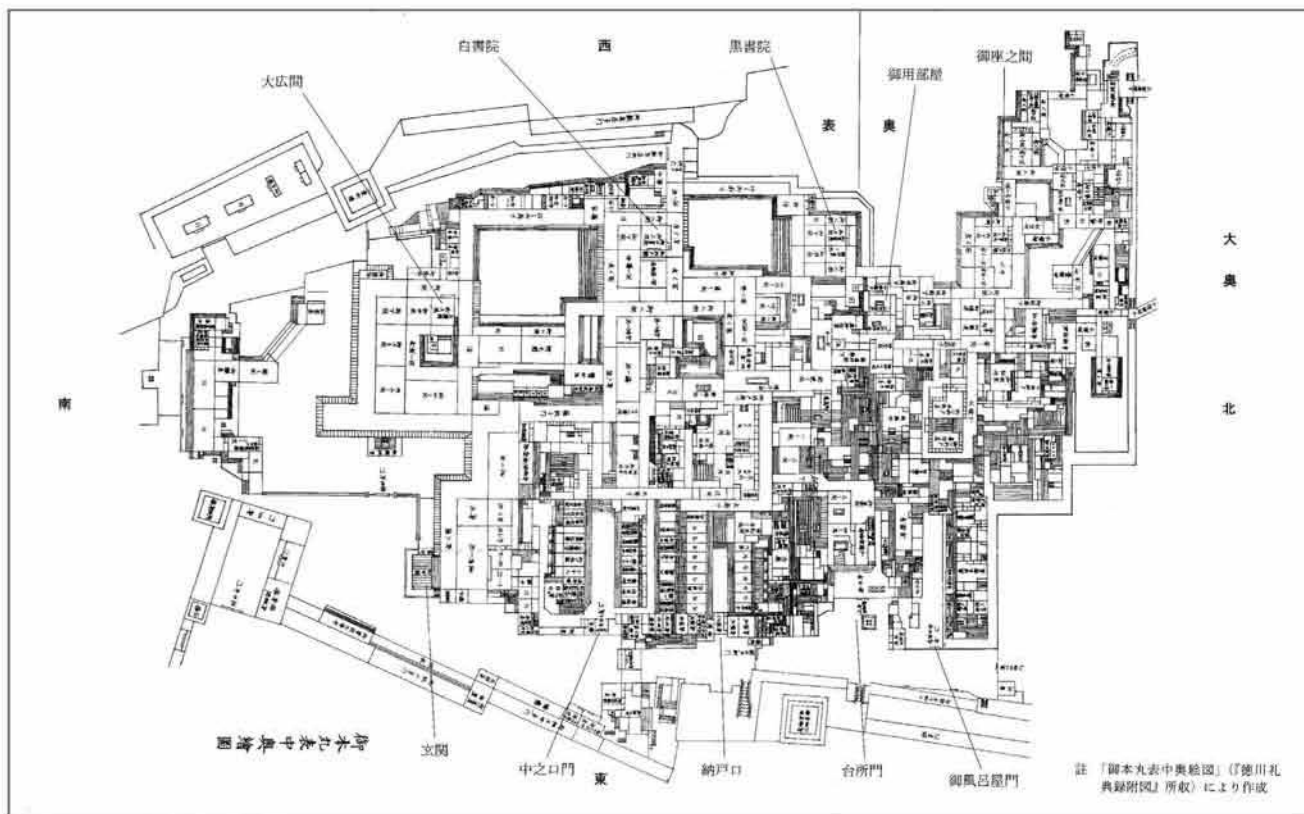


10/21 11/4 11/4 11/4

附録



附図1 江戸御城古図
 (『東京市史稿(皇城篇)』附図1より)



附図2 御本丸表中奥図
 (深井雅海『江戸城—本丸御殿と幕府政治』より)

*本稿は、平成27年度科学研究費補助金・基盤研究C(課題番号25370257)「関西文化圏を中心とする江戸期の紀行文の形成」(研究代表者:湯城吉信)による研究成果の一部である。